

詩誌「放牧」第3号

グループ通夜

HOBODQ

No.3

2013/2014

theme | Lyrical real fantasy

詩と実話

Contents

果てへ・言葉が浮いている
視界の外・中身・吊う・未来
教会の鐘の始まりの告白

詩と実話

果てへ	04
言葉が浮いている	06
視界の外	10
中身	13
弔う	14
未来	16
教会の鐘の始まりの告白	18

果てへ

この苦しみが夢であればいい
昨日など無く、明日もまた無ければいい
今に収斂していけばいい
暗闇の中でうづくまっていたい
誰も近づかないで

ひねくれた私が、誰かのためにパンを差し出したり、
水を与えたり、思いを伝えたり、優しくしたり、
抱きしめたり
出来るのか

人の一生の長さに
目が眩むことがある
あと何回瞬きをすればいいのか
あと何回咀嚼すればいいのか
何語発すればいいのか
何度愛せばいいのか
「有限」とは、なんの慰めにもならない言葉だ

先端へ進んでいく
敏感になり、切先に
ただ寄り添っている
輪郭をなぞる
形を取れないことを責められ
叱られる
もう言葉など無いのだ

あ……
きつく結ばれた指先を
一つの許しとして
承認しよう
招かれた後続の罪を
償うのなら、私は
僕は
君は、ひねくれて
世界を責めるのだ

言葉が浮いているって感覚がありませんよね、って、心のなかでつぶやいて、取りあえず満足した。それは仕事帰り、夕暮れ時、青梅街道沿い、消防署近く。止まらない奔流、それはライヴ。浮きつぱなしで、捕まえられない。するりするり抜けて、躍りになって錯綜して、ここがトートロジーの終点。

もつともつと狂いたい。狂って、例えば、そこら辺を歩いている全然知らない人に蹴りを入れてみたい。バス停で待つてる間に、突然側転とかしたい。墓石に座りたい。懸垂しながら、コーヒーを飲みたい。蚊を飼いたい。でも有目的化したら、きつとすべてが元に戻るはずで、それは世界の端緒だけど、きつと水も飲めないくらい飢えてしまう。

物心ついたときから解離している、もう一人の『自分』はもう許した。一人ひとり、もう一人の『自分』を持っていて、人口は単純に120億人になる。食糧問題は今より二倍困難になる。石油は二倍のスピードで枯渇する。オランダは可及的速やかに沈む。

だからもつとお互いを知り合おうよ。本当は誰も傷つけない。

不均衡さに耐えられないときは、新しい音楽を聞こう。きつとすべてがきょこうに見えてくる。そこは美しい、面倒がない、やさしい、死なない、転換する。

もつと ■ せよ！

言葉の反乱にかこつけて、攫われたふりをしている場合じゃない。お巡りさんが、自分を見ている気がする、道路標識にも監視されている気がする。ここは、リンガーハットの前、東京軌流通センターの角。今日が終われば明日が来るでしょう？ 時間を切り刻んで楽しもうよ。アキレスは亀に追いつけない。切りきざむことがゆいいつのこされた希望。

本を読みました。本にはたくさんの方が出てきて、たくさんの方が起こりました。

本に溶け込んでいきたい。

よだれを垂らしました。

向かいの女もよだれを垂らしました。

武蔵野線の車内、もうすぐ新秋津駅。

本をかばんにしまうと、夜の虫が飛んできた。

理性なんていらぬ。

東京に今も住んでいるのは、彼女が東京に住んでいるから。それは予め決められた未来、迎合するとかしないとか、反乱するとかしないとか、抗うとか、そういう文言はすべて虚無に放つて。原因不明の愛を誓うなら、時間がすべてを溶かしてくれる。

「ここまで全部浮いています。ぶかぶかと、ほら、まぶしい、水が入ってくる、表層を、滑って、言いたいことなんて最初から何もないんだ！と半ばわけになって、それでも統いていく。」

一人が二人になる。二人が四人になる。領土は引き裂かれる。富は配分される。

言葉は分かたれる。

これも浮いた言葉の一つの解法ですよ。大切にしないで。

視界の外

自分の頭がおかしい、と思えば

世界は比較的きれいに見えた

分子へと散っても

すぐに追いついてしまふ

音の出ない楽器を奏で続けて、誰かに気付かれるのを待っているのだ

中身

夜になると泣く
雨が降ると泣く

光がさすと泣く
花が咲くと泣く

死ぬと泣く
泣くと泣く

く泣

泣
く

く
く泣くな

く泣く泣くな
く
な

苦しいところから遠ざかろう

大切なものを捨てていこう

逃げよう

どこまでも逃げよう

泣くな

弔う

老人は腰を曲げて弔事を待つ
半年前に死んだ息子の弔いを終えていない
祈るほど、腰は曲がり
夜は深く、侵食していく
弾かれたように無音の風が流れる
月と雲が互いに牽制している
老人の動静は監視されている
（街灯に集まれよ
雨のあとの匂いを虚ろと見たてて
老人は隠れる

ゆるやかな死は
色を飲み込んで
次元の転換点で、爆ぜた
虚空で発火した意思は
音もなく、まぎれ
もう帰ってこない

囲む畑から立ち上る蔓が
夜の空気に絡んでいる

弔うときはまだ来ず

彼が初めて発した言葉から、醜いものしり合いが始まる
彼が初めて刃物を持った朝、私の人生は緩やかに終わっていく
未来の子供には言葉の正しい効用と、性交の正しい効果を
教えてあげなければいけない

それは私達の役割だ

過ちと正しさは、同時に成り立つ

(昨日買ったこの刃物は、

(未来を切り裂くことが出来ますと

(嘘でもいいから、言つて

彼の血を湛えても、未来は満たされない

昨日庭に植えた芝は、まだ無色透明で、誰かの訪れを待っている
後方から後悔を集めて
前方に水を撒くように、恵む
花から種子が生まれると信じていたのに
とうに枯れていたのだ

帰巢する、彼と彼の子供

ここではない、鏡の中へ行け

平行する世界では、罪に問えないことがあまりにも多い

前進する、向きを誤って、

突き刺さる

血がただ憎い

・「今日もなんにもしませんでした」という、ひかなくてきすみやかな告白が挨拶に変わっていつて新しい生活が始まる

ぼんぼろぼんぴん

おはようって言うてすぐ溶けた人もいるしすみやかにこなしてしまつたほうがどんな告白だつてされる人にとつては良いものだ。そして記憶に残る。ここまでは代筆でここからが本人によるもの。といつた告白が意味をもたないということと同じようにふくらみきつた告白は、自分の好きな食べ物の話題に終始することになる。例えば毎週一回のコメント番組からはじまつた親密な関係。Ⅱ 好きな食べ物はラーメン。それとカレー。こんな状況。で告白に。は技術が必要だ。さつじんをおかしました。シンプルな告白が心の隅々までいきわたる。と思うと嘘は本当になる。

どこかにいるひとたちの悲劇

偶然友達と出会つたことがないんだ、全然。私の家の天井の唐草模様が人間の目玉に似てるつて思つたん

です。それでね、それが原因かもしれない。と思つて。何回も目を開閉させて、そういう確かめ方したんです。本当でした。きつかけです。そういう人もいるけど私はそういう人ではない。ということが。天井の模様の見え方に当てはまつてしまふんです。ねそれでもうイヤや、上むいて寝るスタイル変えよう思つて。それつてひとつの変化じゃないですか、それつて。だから変えてみたらきつとフラグが0から1になるんだつて。どんなフラグかわかりませんが。でも、そうやってみたんです、気になるから。そしたらね、変化つてわからないんですね、私はなんにもわからず、かわらなくて、天井の模様はやっぱり気になつてしまふんです。それにともだちに、であつてないんだ。私、どうしていいかわからなくなつて。と思ひまして。だから天井の目を潰してやろうと思つて。疑似餌をり使つた釣りはやめよう。と思つて。100円で買ひ込んだ角材を打ち込みました。古い漫才師の古い芸をユーチューブで再生しながら。打ち込みました。やきとり。「僕は脂肪はね、目下魚類からとつております」 勢い余つて床に散らばつた画鋲を踏みました。

・忘れていく時間をもつたいないようで、近所のラーメン屋に向かう生活をやめることができる

カンカンカン、カンカンカン
胃を過信してもう一つ替玉を頼んで、結局えづきながら帰っていく道中、なんで思い出とラーメンがおんなじなんだろうが、電信柱のマンション売買に関する張り紙は誰が取り付けたのだろう。たぶん家族が離ればなれになることを私に教えてくれている

どこかにいるひとたちの悲劇
家族が一人いなくなってしまうたんです。おじいちゃんです。おじいちゃんというか、最低の男だと言った人もいました。家族でした。その日、私は卒塔婆をもつてつたっていました。たしかそう思います。つくしが気になりました。手前がつくしで、その先にお墓があつて、もつと奥には、ちよつとした林があつたと思います。私は卒塔婆をもつて立っていました。細長い木の板で、墨でなんとか書いてあるのです。ね、生きにくいね、よくわからない言葉で誰も知らない場所へ送り出されるとは、思わなかったね、これ

は憐憫であつてますか？ 夕方一人で自宅付近を散歩していたら、小学校の同級生に会いました。久しぶりだね、忘れかけていた人だ。久しぶり、本当に死んでるんじゃないかって思ったよ。そうだね、連絡とつていなかったからね。なにしているの、なにしているって。今は、散歩しているよね。そんな対話をしました。（別れて）私は、少し暗くなってきた路地を、できるだけゆつくりあるいて（どうしてもそうしないといけないと思つて）手を振りながら、あるきました。おじいちゃん、家族でした。過去に閉じ込めても大丈夫になつてしまいました。私は家族がひとりなくなつて、新しいと思つてしまいました。でもわたし死んでるって思われたつてなにかわつてないんだよ。といちどかんがえて、もういちど、でもおじいちゃんは絶対に死んでるんだ。と、もういちど、死者をころしました。道路が塀に囲まれて、いるような場所です。死んだ猫が通りすぎて、するりと塀の向こうに消えていきます。

・ゲーム中の役割が生活に反射するのでとにかく救うまではおしまいにできない

SECの電源を入れるとデジタルな世界が発生する（発声を模した電子音とともに倍角の文字が目的をお知らせする）
 世界地図は あらかじめ決められた計画に従って崩壊を
 はらませる 全部決まってるから 好きな終わり方を決めることはできないよ いいよるけど

いずれにせよ救う必要はある（人命救助に終始）

カンカンカン、カンカンカン

隠れているひとたちの合図

競輪場に行っただんです。はじめて。50円の入場料を払って中に入ると、池がありました。池にはカモがいました 少しのこどもがいました 私は重いバッグをふたつもつていました 風が強い日の午後で 台風が過ぎたのか向かっているのか どっちかは忘れてしまいましたけれど台風の影響でした 台風の風と卒業式の日の風が似ていて 襲の数えられないスカートと過去好きだった人のことを思いました 池

にはカモがいました 私は券を100円だけ買って競輪するところへゆきました 選手たちは60メートルくらいあるトラックを5周するんです。それで4周目に「次の一周が最後の一周だよ」という合図に鐘を鳴らすんです カンカンカン、カンカンカンって鳴らすんです カンカンカンカンカンカン 鐘の音ってどうしてどきどきするんだろう カンカンカンカンカンカン は（アクシデントだったんだ）と 思いました 中学生のとき 自転車で学校へ向かっていました 季節は ふううでした 夏でも冬でもなかって 春か秋でした と 思いますが 公園のすぐ横の道で どれどろの猫を見たんです 幽霊ではない と思います 眼窩から飛び出した眼球が視神経で頭とつながっていました 猫でした うごきませんでした ほんのりと全身 黄色に染まっていた きみがかつていたねこ？ 首輪 していいな かったと思いますが きもちわるいな、というよりも こんな田舎の通学路でおっちぬ気持ちを感じました ね おぼえている よ その日 同じクラスのかたぎりくんが 万引きで補導されました 呼び慣れ

ていた名前です かたぎりくん 卒業してから合っ
ていないです たぶん 呼び慣れていた名前です
私は放課後 友達と教室に喋っているときに職員室
へ引っ張られていく彼をみました 私は 彼と友達
だった ね 私は そうだった と思います そう
です だから 職員室へ のぞきに行つた と思
います のぞきに行きました 泣いていました ビッ
クリマンチョコを 先生は手に持っていました
ビックリマンチョコ 彼のジャン・バルジャンスペッ
クに 私は どちらのねことかたぎりくんが 融
合した と思います とーおくから、カンカンカンカ
ンカンカン と 消防車の鐘がなっていました ね
それは後に知つたことですが 消火をお知らせす
る合図なのでした そしてそれらは一緒になつて融
合した と 考えています ともだちとどちらの
ねこと消防車の鐘の音が一緒ですから ね その記
憶を競輪のジャンで思い出したということです 私
にとってのNPC

・メガネが壊れたことで 私の不幸を予言する、や預期する、や予告する

視力が弱くてメガネが無いと物の輪郭がわからない。0から9までの数字の輪郭があやふやで無収入のオレの銀行口座から何が出て行って何が入っていくのかわからなくなる。昼から夜に環境は灰色のモザイクから発光の点々に変わる。赤は赤信号、走る赤は車その横の白色の連続は街灯そのむこうの黄色は誰かの部屋。空にゴミみたいな丸いゴミが落ちてて気になる。でも誰かと対面する時はこれくらいわからないほうがいい。

約視力 0

空にゴミみたいな丸いゴミが落ちてて気になる。寝るときメガネをかけたまま寝ている。一日の継続(呪い)をかけるためにそのまま寝る。覚醒(続く)はメガネ探しからはじまる。あらぬところに落ちていて。三年目の今日は布団に包まれていた。三年目の私の目。折れか

けている。鼻のところにヒビが入ってぶらぶらしている。窃盗だつて時々許されるし、そのままかけて志ん朝の落語を聞いている(居残り佐平次)。私の目は二つにわかれて落下する。「怖いね。これは予告なんだ。」つてなことをイイまして。メールボックスに到着する不幸のお知らせもガウシアンにぼやけてその報告を無視できる。「恐ろしいね。誰も居ないのに居るように会話が終わる。」つてなことをイイまして。ちょうど志ん朝が「ごま塩」と発声している。夕方。2つ目の訃報が1つ目よりも軽やかに通りぬけるように目がもうひとつ軽くなる。ジェットコースターみたいに遠景ブラス思つてることが吹き抜ける部屋の中で視力をなくす。それで思っていることも加速して死んでいく。はい、もうなくした。中学の時スーフアミで作ったロールプレイングゲーム。お金ないなと思つて、労働のためのホームページをぼんやり眺めてる。うわす、うわすごい。全然見ええない。

けいこくをけしかけることばのつまさきではじかれたこくはくというこえはそのままもじとなってかさなりはしりがきされたこくうらがわはつくえにおかれたままうちあげられうちあけられたものちんもくをもつてかんけつする

：うちすてられたごみに火を放つ

けしやすが空に浮いている。コンクリートのかたまりを落として仮設トイレの便器を壊すことの罪が無数のおもらしを生むことであつたらひたすら耐えるという祈りには価値がある。一度広がった火をおしっこで消せないということが真理ならば、人の死に様の無残さをもつて生きることの啓蒙をすることはできない。やってくる消防自動車の幻覚を見ながら、明日罪が明らかになるという予感でいっぱいになる自転車をこぐあわあわあわ予感と現実感の隙間(おれはおぼれかける)

赤面症というのは隠せない病で、私は対話を疎んじていないのになぜか嫌われている。帰り道にあるあるタクシー会社の寮は朽ちかけている。さまざまが言葉が呪いとなつてあなたがたというわたしたちの皮膚感覚上で行進(交信)しているように、建築物(及び周辺地帯)はダンボールで覆われている。ダンボールの重なるの奥のブルドーザーとショベルカーは黄色から錆色へ脱皮をしていて私はそのふたつに近寄つて打

ち捨てられたそのかたを触る。接触により魂は信仰に帰り、言葉によらない打ち明け話を関係のあいだに置き去りにする。交信の再開に断絶はあらわれ、ブルドーザーとショベルカーと私という区分をより強固なものにかえてしまう。

私が花崗岩であつたら、融合は明らかである。

(ライアン・ラーキンというアニメーション作家がいて、かれは家をなくしてそのまま路上で生活し晩年少しだけ恵まれ、そしていなくなつてしまつた男である)が、彼の1968年の作品「Walking」は人間の歩くという動作を通じてある街に暮らす人々の所作をつぶさに描いた作品である。描かれている彼らは最終的に輪郭をなくして、色の範囲になる。)わたしの錆びない皮膚は接触から先を拒んでいいる。冬眠や脱皮をしない透明なわたしは瓦解の予感に満ちているダンボールの箱庭で三項関係の一項に代入されて数学的に処理されるだろう。そのさなか、母親のつくつたカレーを肉体はほおばっているだろう。計算の終わりに、わたしのめはつきになる。布団の中で眠りかけながら終末と月曜日を一つにして遊ぶ。曜日感覚の決算報告が来週

の結末をあらかじめ設定する。ふたたびわたしはここにいることになる。

帰り道の途中にあるタクシー会社の寮のなきがらへ侵入する。と、いうことの冷たいのしさを隠しながら午後の日差しが窓の割れたガラスの隙間からホコリまみれの床を照らしている。押入れの奥に古い写真が置かれている。ホラー映画のカット割りを意識した移動に浴槽は答えない。からっぽの靴箱の中。(バストイレ別・エアコン・シャワー付洗面台・陽当り良好・シューズボックス・南向き・洗面所独立・雨戸・駐車場・閑静な住宅地・田園風景・雨戸・駐車場・閑静な住宅地・田園風景)

ECHO これはひとつのテストです

ECHO 聞こえていますか？

ECHO 聞こえています。

ダンボールはどこからやってきたんですか。どうしてここにおいてあるんですか。ダンボールに火をつける時の気持ちを覚えていない。

グループ通夜

一戸智弥 04-17

宮宮局々 18-35

放牧 第3号 詩と実話
HOBORQ Lyrical real fantasy

著作 グループ通夜

デザイン 小池俊起

発行日 平成二十五年十一月四日

発行部数 一〇〇部

本誌誌をお読みいただいた
ご感想を左記のメールアドレス
レスにお送りいただけると
幸いです。今後の制作の励
みとさせていただきます。

groupnyu@gmail.com